

【書評・紹介】

山田敦士 (編) 『中国雲南の書承文化：記録・保存・継承』

(東京, 勉誠出版, 2019 年 3 月, 148×210mm, 224 頁, 2,800 円＋税)

山 田 敦 士



中国雲南省では、チベット文化圏やビルマ文化圏、タイ文化圏、中華文化圏が交錯するというその地政学的な特徴を背景に、多様な民族文化が発達してきた。書承文化 (writing culture) は、そうした歴史的・文化的多様性を示す好例である。今日、省内各地において、タイ系、チベット系、漢系、モンゴル系、アラビア系、ラテン系および独自系 (トンパやイ) などの文字表記を用い、様々なテキストが生みだされている。従来、研究者は主にこうしたテキストの掘り起こしと解題、内容分析に注力してきた。

テキストには、言うまでもなく、過去の出来事に対する記録としての価値がある。しかし他方で、テキストには、記録や保存、継承など人間の様々な社会活動そのものとしての側面がある。こうしたテキストを取り巻く「コト」としての側面にも光を当てることで、人びとの歴史や社会、文化の動態をより深く描き出せる可能性がある。そこで編者は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所において、多分野のフィールド研究者からなる共同研究プロジェクト (課題名「中国雲南におけるテキスト研究の新展開」2015 年度－2017 年度) を組織し、以下の視点からの包括的なテキスト研究のあり方を検討してきた。

- (1) 道具としてのテキスト：リテラシー、教育、口承との関係
- (2) 記録物としてのテキスト：解題、内容の分析、個別性への視座
- (3) テキストをめぐる社会活動：作成、分類、複製、保存、継承、廃棄

本書は、上記プロジェクトの成果の一つであり、雲南地域における書承文化研究の最前線を報告するものである。内容は高度に専門的なものとはせず、興味をもたれた専門外の方にもわかるように平易な記述を心がけている。

本書は、編者による総論とプロジェクトにて議論された 13 編の論文および 2 編のコラムから構成される。まず、総論においては、雲南地域の特徴と書承文化研究の可能性について述べる。続く第Ⅰ章は「少数民族の書承文化」と題し、雲南省の少数民族における書承文化の現状を示す 9 編の論考を示す。いずれの論考も、フィールドワークに軸足を置いた、第一線からの貴重な報告である。続く第Ⅱ章は「東南アジア世界・中華世界とのつながり」と題し、雲南地域の歴史的・文化的背景を理解するため、周辺文化圏とのつながりや広がりを示す 6 編の論考を示す。具体的な目次は次のとおりである。

総説：雲南と書承文化（山田敦士）

第Ⅰ章 少数民族の書承文化

- ・ナシ族におけるテキスト：その形成と背景（黒澤直道）
- ・ナシ族歴史史料：非漢文史料から見えてくるもの（山田勲之）
- ・彝語・彝文の辞書について（清水亨）
- ・徳宏タイ族における誌的オラリティの伝承活動：女性詩師ワン・シャンヤーの取り組み（伊藤悟）
- ・文字がもたらす権威のゆくえ：中国雲南におけるラフ文字創設と口承文化との関わり（堀江未央）
- ・滄源ワ族自治県における書承文化：無文字社会における文字表記とテキストのゆくえ（山田敦士）
- ・大理白族の白文の形成とその用途（立石謙次）
- ・イスラーム教育におけるテキストの変容：回族の民族・宗教性の変化との関係から（奈良雅史）
- ・フォークロア概念の終焉：雲南ハニ族の伝承／伝統的知識と柳田国男（稲村務）

第Ⅱ章 東南アジア世界・中華世界とのつながり

- ・タイにおけるミエンの歌謡テキストと歌謡言語（吉野晃）
- ・雲南・四川南部の漢族・非漢民族の漢字文芸と文字信仰：中華圏周辺部の対聯・惜字炉「字庫塔」（川野明正）
- ・雲南下層社会への漢字リテラシーの普及：明清時代を中心として（西川和孝）
- ・民間文書の収集保存と地域資源化：貴州省東南部錦屏県における清水江文書（相原佳之）
- ・【コラム】シェンケーン文書：西北ラオスにおけるタム文字の使用（飯島明子）
- ・【コラム】イ族支配階層の漢文化適応（野本敬）

本書の意義は大きく以下の三点にあると考える。

(1) 地域の歴史動態研究への貢献

雲南地域の多くの民族は、東南アジア世界と歴史的なつながりを持ちつつも、漢文化の急速な拡大・浸透という共通の大潮流の中にある。こうした流れの中で、どのようなテキストがいかに活用されているのかを知ることが、地域の歴史、あるいはそれに基づく社会・文化動態を紐解く重要な手がかりとなる。

(2) 新たな研究方向性の提示

人文科学研究にとって、テキストは記録物として重要である。しかし同時に、テキストには、記憶や思考、表現や伝達などの知的営みを実現する媒体という側面があることも見逃せない。本書では、人間の知的営みのプロセスや結果としてテキストを位置づけ、当該地域の人々の社会や文化のあり様を解明する新しい方向性を提示した。こうした視点は、従来のテキストの内容分析だけでは得られない知見をもたらす、ひいては新たな研究領域（テキスト研究論）の構築にもつながる。

(3) 社会的意義

中国雲南地域の多様な文字表記による豊かな在地テキストの存在は、他の地域に比

して、きわめてユニークである。様々な文化圏が交錯する当地域の書承文化の現状は、文化多様性の意義を考えるうえで、格好の題材となる。

本書は、多分野からのアプローチによりテキスト研究論の領域を構築する新たな試みである。今後の発展のためにも、大方の御批評をお願いしたい。

(やまだ・あつし／日本医療大学)